ドイツ・バイエルンの農村は今

――石見神楽&未来農業研究団バイエルンツアー報告　その4

川村　一成（奈路・農業）

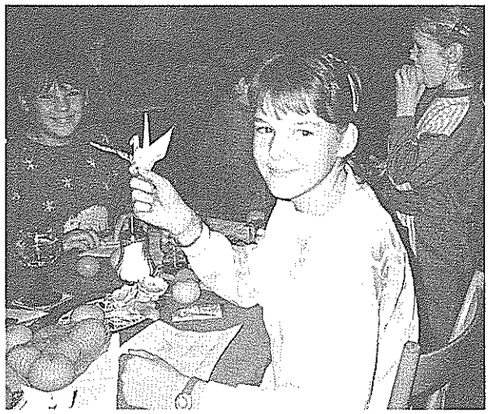
神楽の公演と――草の根交流

今回のツアーの半数は、島根県弥栄（やさか）村の神楽団。昨年夏、今回のドイツツアーの事前研修会を兼ねた、中山間地農業国際シンポジウムがこの村で開かれ、私も出席した。

弥栄村は人口二千人足らず。国道ない、鉄道ない、水道ない、ついでに信号ないという村で、あるのは自然と神楽と、何とかしなければという村民の熱意。農耕文化の中で数百年にわたって育まれたこの地の神楽が、ドイツで二回の公演を行った。

町の公会堂での公演に、小学生から八十六歳のお年寄りまで集まって、ジュースやビールを飲みながら、勇壮で神秘的、ゆるやかな動きからエイトビートの激しい舞いへの変化、そして魂を揺さぶるような太鼓と笛との不思議なリズムの石見神楽に酔った。クライマックスの、須佐之男命（すさのおのみこと）が八岐大蛇（やまたのおろち）を退治する場面では、全員総立ち。感動の拍手に包まれた。

午後八時から四時間の神楽が終わると、今度は地元の農民吹奏楽団の登場。日本でもよく耳にする曲が次々と軽やかに演奏される。真っ先に団長が、昼間訪れた園芸農家の奥さんと踊り出すと、神楽装束のまま小学生の女の子と踊るもの、腰回りは三倍もあろうかという中年の女性に振り回されながら踊るもの、異色のペアがホールを埋め、たちまちダンスパーティーに。ダンスの苦手な団員は、身振り手振りで交流を図る。打ち解けた雰囲気の中では、言葉は通じなくてもコミュニケーションはできる。



神楽公演の幕あいに折り鶴を教えて交流

午前二時、全員肩を組んでのフォークダンスで、熱気と興奮のフィナーレを迎える。翌日は土曜日で学校が休みということもあったが、小学生も高校生もこのフィナーレまで一緒に楽しみ、親も帰るよう言わないことに驚くとともに、経済的には決して豊かではなさそうな農家の人たちが、いきいきと心豊かに、家族そろって生活を楽しんでいる姿に大きな感銘を受けた。

ここにも――後継者問題が

農村を回った後、ミュンヘンのバイエルン州食糧農業省を訪れ、村づくりや農業政策、自然を残した耕地整理のやり方など、自信に満ちた話を聞いた。すでに報告してきたように、「バイエルンの道」と呼ばれるこれらの施策は、今や旧西ドイツだけでなく、EC諸国にも大きな影響を与えているとのことだから、自信のほどもうなずける。

しかし最後に、「日本では農業後継者の減少と、農業青年の嫁不足が問題となっているが、ここではどうなのか」と質問すると、途端に表情を曇らせた。バイエルンでも同様の問題があり、しかも解決方法は見出せないという。『バイエルンでさえそうなのか』。団員一同から深いため息が漏れた。

統一直後の――ベルリン

私たちが訪れる一カ月前に、悲願の再統一を果たしたドイツ。何事もなかったかのようなバイエルンの農村と違って、東西分断の象徴であったベルリンでは、統一直後の不安と戸惑いが感じられた。

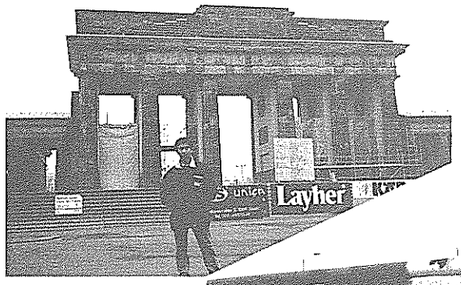
「壁」が撤去されたブランデンブルグ門は、再統一が決まった一年前の熱狂がうそのような静けさで、旧東ドイツの軍服や軍章、車のナンバープレート、そして壁の破片を売る闇市ばかりが目を引く。近くには、壁を越えようとして殺された人々の白い十字架が並んでいる。最新のペンツやフォルクスワーゲンと並んで、内装は何もない、二、三十年ぐらい前の型の東ドイツ車が走る。

厳しい検問で知られたチェックポイントチャーリーは、取り壊しの真っ最中。そして「壁」も。

高さ四㍍、最上部の厚さわずか三〇㌢の壁が引き裂いていたものは何だったのか、東西冷戦とは何だったのか、そして経済問題、失業者問題など、さまざまな課題を抱えた新生ドイツの歩む道は、と重厚すぎて陰鬱（うつ）な感じのするベルリンの街を歩きながら、柄にもなく考えるのだった。

◇　◇

「ドイツ・バイエルンの農村は今」は4回シリーズの予定でしたが、都合により5回に延長します。



改修中のブランデンブルグ門(上)と、壁ギャラリーとして永久に保存されるベルリンの壁の一部(右)

――同和教育シリーズ――

部落はいつ、だれが、何のために つくったのでしょうか⑮

前回、野中部落は、野中兼山の西野地村開拓事業に携わっていた人の一部が、後の身分再編成の過程で部落に編入されたものと考えられると書きましたが、これを物語るものとして、坂折庄屋藤岡家に残された文書が長岡村史に記されています。

乍恐覚（おそれながらのおぼえ）

一、私先祖代々庄屋役を務め、坂折の御本田の支配をしておりましたところ、寛永年中より新田野開墾とその支配を務め、私の親父十五年、私儀三年間、合計十八年間無給で作配（支配）しておりましたが、その後庄屋給の田を下されるようになり、御貢物米を上納しておりますことは間違いない事実でございます。

寛文九年　坂折村庄屋　木工右衛門

御奉行所様

新田開発は、野中兼山のかんがい用水路の導入によって寛永年中から進められましたが、坂折部落の成果は、一六七四年（延宝二年）の指出書に左のように書かれています。

指出

外に地一反三拾代四分庄屋給

一、地高拾六町二反五代二分（じだか）　坂折かわた野開（のびらき）

五反四拾九代二分　畠

一町三拾九代　山畠

拾四町五反拾六代三分　田

一、地一代四分

但し、木工右衛門御用水溝でございますが、田地をほりさげ寛文拾二年に開墾致しました。（後略）

延宝二年七月十八日

坂折庄屋　木工右衛門

御代官　上島六良右衛門様

各地の被差別部落は、それぞれ独自の歴史を持っています。長い年月の間、大名の築城工事に携わった多くの技術者や作業人夫の中で、工事が終わっても帰る所のない一部の人々がその地に住みつき、後年、賤民身分に編入された例もあります。高知市の小高坂部落などもその一つと考えられています。

部落人口についての記録は少ししかありませんが、最も古い記録で、一六八三年（天和三年）、当時月番家老の署名入りの記録に「かわた者」一千六百四十一人とあります。当時の土佐藩の総人口は、三十一万六千五百八十七人です。これが、百八十六年後の一八六九年（明治三年）には、高知藩の人口は、四十九万七千五十六人で約一・六倍ですが、部落の人口は一万六千八百九十四人と、十三倍にも増加しています。日本の総人口は江戸幕府が開かれたときも明治初期も約三千万人で、あまり増加していません。これは当時、それくらいの人口を養うだけの生産しかなかったからでしょう。

部落の人口だけなぜ十倍以上に増えたのでしょうか。それは、部落に生まれた赤子を、神仏より授かったものと大切にし、間引きなどで殺さなかった部落の人たちの優しさによるものと、年貢を納められなくなった逃亡農民が入り込んだり、大ききんの際、支配者によって部落に入れられた人がいたためと考えられます。